



## 報告書

# 「新日本室素労働組合60年の軌跡」 全国巡回資料展

開催期間：2009/10/30(金) — 2010/1/21(木)

熊本学園大学水俣学研究センター

主催：熊本学園大学水俣学研究センター

共催：法政大学大原社会問題研究所  
大阪人権博物館

# 目 次

I 開催の経緯と目的 .....	1
II 展示会の概要 .....	2
III 展示構成 .....	8
1. 展示構成の概要 .....	8
2. 各会場の展示資料点数 .....	8
3. 新日窒労組 OB による展示説明の実施 .....	9
4. 映像資料公開 .....	9
5. 資料展タイトル .....	10
6. 熊本・水俣展での資料展開催時間延長 .....	10
IV アンケートの集計結果 .....	11
V 財政報告 .....	15
VI スタッフ・協力者一覧 .....	16

## I 開催の経緯と目的

新日本窒素労働組合（以下、新日窒労組と略す）は、会社から組合事務所を借り受けていたが、2005年3月30日組合解散とともに、事務所を会社に返還した。この組合事務所に、保管されていたのが本資料（新日本窒素労働組合旧蔵資料と称す）である。組合解散が日程にあがってきた頃から、資料保存の動きがはじまった。一方、熊本学園大学では水俣学を原田正純らが中心になって推進し、2004年6月水俣学研究プロジェクト事務局長花田昌宣名で、「研究実施のための研究設備・研究環境の整備のための協力依頼」と題する文書を組合に提出、これが受け入れられ、移管に向けて組合資料の整理が組合事務所で始められた。

2005年4月、本学に水俣学研究センターを設立し、同年8月、水俣市内に水俣学現地研究センターが設立されると、組合資料は水俣学現地研究センターに移管された。この資料の整理作業には、元組合員たち約10名と大学の研究者らが当たった。2009年3月、5年の歳月を経て『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』（別紙資料1-1）が完成、2010年から資料公開することを記念して、全国資料巡回展を企画した。本資料展開催の目的は、以下の3点である。

1. 現在のチッソ株式会社は、1906年に曾木電気が日本カーバイト商會を合併して日本窒素肥料株式会社と社名変更し、水俣工場での操業開始から100年になる。この会社における労働運動は、1946年1月26日に結成された日本窒素肥料株式会社水俣工場労働組合をもってはじまる。戦後の混乱と社会運動の高揚期に、当時の管理職や熟練労働者たちを中心として組織されたこの労働組合は、1951年に合化労連に加盟し、新日窒水俣労組として再出発する。その後、1953年の身分制撤廃争議、1962年の安定賃金闘争を経験する。この新日窒労組の闘いは、組合員たちの家族のみならず、居住地区を拠点にした地域ぐるみの闘争として闘われた。この労組が、水俣病を引き起こした企業の社会的責任を追及し、患者とともに闘うようになったのは1968年のことであった。自らの会社の責任を追及した唯一の新日窒労組の資料を残し、この労働者たちがなぜ闘いえたのかをたぐっていききたい。

本資料展が示す組合旧蔵資料が、各方面の研究者の手に届き、その意味を読み解いていただきたく開催の第一目的とした。

2. また水俣は、都心部からは遠い。しかし、本資料展を行い様々な方々に資料の存在を認知していただき、また、あえて水俣という地で資料一般公開をおこなうことで、熾烈な労働運動が巻き起こった地、水俣病被害者たちが今なお国や県、チッソと闘っている水俣、現地に足を運んでほしいとの願いを込めた。
3. 水俣病事件は、公式確認から54年経てもなお解決しておらず、被害者の闘いは今日も続いている。しかし、2009年7月に国会を通過した水俣病特措法によって、チッソは分社化し、原因企業としては消滅しようとしている。このような時期にこそ、この組合の経験は記録されるべきであり、この資料展を通して当センターの立ち位置を明確に示す必要があったのである。

## II 展示会の概要

各会場の資料展概要は、以下のとおりである。(敬称略)

東京展	資料展	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		期間	2009/10/30(金) - 11/8(日) 9日間 10:00 - 17:00
		会場	法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー14階博物館
		主催	熊本学園大学水俣学研究センター
		共催	法政大学大原社会問題研究所、大阪人権博物館
	オープニング	日時	2009/10/30(金) 10:00 - 10:30
		会場	法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー14階博物館
		出席者	五十嵐仁(法政大学大原社会問題研究所所長)、若杉隆志(法政大学大原社会問題研究所事務室主任)、山下善寛(新日窒労組OB)、山平勝利(新日窒労組OB) ほか
	映像シンポジウム	タイトル	「水俣」のテレビ・ドキュメンタリーを読み解く - 環境報道アーカイブの構築に向けて -
		日時	2009/11/3(火) 13:30 - 17:00
		会場	法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー14階資格課程共同実習室
		講演者	小林直毅(法政大学教授)、藤田真文(法政大学教授)
	シンポジウム	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		日時	2009/11/8(日) 14:00 - 17:00
		会場	法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎5階S505号室
パネリスト		原田正純(熊本学園大学教授)、山下善寛(新日窒労組OB)	
コーディネーター		小林直毅(法政大学教授)	



若い学生も多く来ていただいた。  
一生懸命にメモをとる姿が印象的であった。



映像シンポ会場。廊下には立ち見の方であふれた。  
左手前茶色のジャケットの方は、桑原史成氏。

なお、東京展開催に当たっては、下記の日程・場所で記者会見をおこなった。

日 時	2009/10/28(水) 16：30－18：00
場 所	環境省記者クラブ 中央合同庁舎第5号館25階
出席者	花田昌宣（熊本学園大学教授）、井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）



また、東京展オープニング後、記者会見を下記のようにおこなった。

日 時	2009/10/30(金) 10：00－10：30
場 所	法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー14階資格課程共同実習室
出席者	五十嵐仁（法政大学大原社会問題研究所所長）、山下善寛（新日窒労組 OB）、 山平勝利（新日窒労組 OB）、花田昌宣（熊本学園大学教授）ほか



東京展オープニング写真。  
五十嵐所長には祝辞を頂戴した。



記者会見の様子。左から、五十嵐所長、花田、山下、山平。  
記者は、共同通信、朝日、読売、熊日、週刊金曜日など6社。

大阪展	資料展	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		期間	2009/11/17(火) - 11/29(日) 13日間 10:00 - 17:00
		休館日	2009/11/24(火)、11/27(金)
		会場	大阪人権博物館 特別展示室
		主催	熊本学園大学水俣学研究センター
		共催	法政大学大原社会問題研究所、大阪人権博物館
	オープニング	日時	2009/11/17(火) 10:00 - 10:30
		会場	大阪人権博物館 特別展示室
		出席者	秋定嘉和 (大阪人権博物館館長)、小頭芳明 (大阪人権博物館常務理事)、朝治武 (大阪人権博物館学芸員)、石橋武 (大阪人権博物館事務局長)、小島伸豊 (大阪人権博物館事業推進室長)、吉崎進 (大阪人権博物館会計課副主査)、山下善寛 (新日窒労組 OB)、山平勝利 (新日窒労組 OB) ほか
	シンポジウム	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		日時	2009/11/29(日) 14:00 - 16:00
		会場	大阪人権博物館 リバティホール
		パネリスト	原田正純 (熊本学園大学教授)、山下善寛 (新日窒労組 OB)
		コーディネーター	花田昌宣 (熊本学園大学教授)



会場入口の看板は、大阪人権博物館作成。  
休日にもかかわらず、搬入・搬出など協力していただいた。



大阪展では、図録に掲載した全資料を展示した。  
また、組合所蔵フィルムもビデオコーナーを設け公開した。

熊本展	資料展	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		期間	2009/12/7(月) - 12/20(日) 14日間 平日 10:00 - 20:00 土・日・祝 10:00 - 17:00
		会場	熊本学園大学 14号館 1階1411教室
		主催	熊本学園大学水俣学研究センター
		共催	法政大学大原社会問題研究所、大阪人権博物館
	オープニング	日時	2009/12/7(月) 10:00 - 10:30
		会場	熊本学園大学 14号館 1階1411教室
		出席者	石田博文 (新日窒労組 OB)、山下善寛 (新日窒労組 OB)、山平勝利 (新日窒労組 OB)、坂本正 (熊本学園大学学長)、本山憲一 (熊本学園大学事務局長)、下田高幸 (熊本学園大学高度学術研究支援センター事務室長) ほか
	シンポジウム	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 水俣病とむきあった労働者
		日時	2009/12/12(土) 13:00 - 15:00
		会場	熊本学園大学 11号館1163教室
		パネリスト	石田博文 (新日窒労組 OB)、糸田憲夫 (新日窒労組 OB)、江口和伸 (新日窒労組 OB)、江口睦美 (新日窒労組 OB)、山下紀久子 (新日窒労組 OB)
		コーディネーター	花田昌宣 (熊本学園大学教授)



上は、熊本展オープニング写真。資料展開催の報道は、地元メディアによって新聞、テレビで大きく報道された。



右は、シンポジウム写真。これからの労働運動への期待を込めてお話しいただいた。

水俣展	資料展	タイトル	新日本窒素労働組合60年の軌跡 地域とともに患者さんとともに
		日時	2010/1/8(金) - 1/21(木) 14日間 月・金 10:00 - 18:00 土・日・祝 10:00 - 17:00
		会場	水俣市婦人会館・水俣学現地研究センター
		主催	熊本学園大学水俣学研究センター
		共催	法政大学大原社会問題研究所、大阪人権博物館
	オープニング	日時	2010/1/8(金) 10:00 - 11:00
		会場	水俣市婦人会館
		出席者	森近（水俣市副市長）、緒方誠也（水俣市議会議員）、下川満夫（水俣市立水俣病資料館館長）、棚橋康子（地域婦人会連絡協議会会長）、上村好男（元センコー運輸水俣労働組合長・水俣病互助会）、横田重信（新日窒労組OB）、糸田憲夫（新日窒労組OB）、石田博文（新日窒労組OB）、緒方紀明（新日窒労組OB）、高橋幸一（新日窒労組OB）、徳永常喜（新日窒労組OB）、山下善寛（新日窒労組OB）、山平勝利（新日窒労組OB）、水俣袋地区棒踊り保存会の方6名、日吉フミコ（水俣病市民会議）、坂本正（熊本学園大学学長）、目黒純一（熊本学園大学常務理事）、本山憲一（熊本学園大学事務局長）、下田高幸（熊本学園大学高度学術研究支援センター事務室長）ほか
	記念講演	タイトル	会社国家・日本の病根 - 水俣病が問いかけたもの -
		日時	2010/1/16(土) 14:00 - 16:30
会場		水俣市公民館2階ホール	
講演者		佐高信（経済評論家）	



水俣展オープニングでは、水俣市袋地区の伝承芸能である「棒踊り」が婦人会館前で披露され、資料公開の門出をお祝いいただいた。



婦人会館1階写真。会場には、故小形喜代太氏（新日窒労組OB）のご遺族から頂戴した花が飾られた。



なお、水俣展では、「新日窒労組 OB と家族の文化活動展」(以下、作品展と称す)を下記日程で開催した。この作品展は、新日窒労組執行委員長であった山下氏の「組合は闘いばかりじゃなかった。人間として文化的な事もしよった。」という一言から始まった。組合には、運動サークルのほかに書道などの文化サークルもあり、それらを同好会として予算をつけ、組合員のスポーツ・文化活動にも積極的に取り組んでいた。こうした組合活動の幅の広さが、この組合の豊かさを示している。資料展では、「第7部 組合の日常」で組合の生活の一部に触れてはいるものの、組合がどのような文化活動をおこなっていたかまでには至っていない。組合の文化活動を知ることは、自らの会社の責任を追及した唯一の新日窒労組の労働者たちが、なぜ闘いえたのかをたぐりよせる手がかりでもある。こうした意図から、この作品展を開催した。作品展の概要は下記の通りである。

水俣 作品展	タイトル	新日窒労組 OB 家族の作品展
	日時	2010/1/13(水) - 1/15(金) 3日間 10:00 - 18:00
	会場	水俣市公民館 2階ホール
	主催	作品展実行委員会/親交会・熊本学園大学水俣学研究センター
	出品者数・作品点数	出品者数111名、作品点数313点



作品は、川柳、書、日本画、ペン画、詩、手芸、竹細工、生花、など多岐にわたった。文化活動といいながら、師として教えられている方々ばかりで、会場は圧倒されるほどの迫力に満ちていた。



会場内では、お茶もたてられた。元青年婦人部の「かあちゃん」たち。

### Ⅲ 展示構成

#### 1. 展示構成の概要

「新日本窒素労働組合旧蔵資料」は、新日窒労組が保存していた組合文書、書籍、物品等の現物資料および写真資料の総称である。1946年の組合結成直後から2005年の組合解散に至る時期までの資料より構成されている。新日窒旧蔵資料の資料点数は次のとおりである。

文献資料	6,225点
写真資料	63,600点（概数）
物品資料	297点

本展示資料は、上記労組旧蔵資料や本学が所蔵している資料を中心に、江戸時代からの水俣の歴史とチッソの歴史を加えて構成した。これは、開催の目的ですでに述べたように、労働運動史も水俣病事件史も人と社会の歴史であり、その源をたどることから始める他にないと考えたからである。よって、展示構成は、組合自身も自宅待機、工場縮小、解雇などと苦しい闘いの時期であったにもかかわらず、自らの闘いと患者の闘いを重ね合わせ、1968年8月30日の定期大会で、公害発生企業の労働者として「何もしなかったことを恥とし、水俣病と闘う」という「恥宣言」を採択し、水俣病患者支援を打ち出していくまでの労働運動史を中心とした。

また、水俣地域には縄文時代の遺跡もあり歴史は古い。展示自体は、地図に残されている江戸時代からはじめ、下記7つのパートで構成した。

- 第1部 江戸時代の水俣
- 第2部 水俣市街の形成と日本窒素の創業
- 第3部 日本窒素労組結成と身分制撤廃闘争
- 第4部 安定賃金粉碎闘争
- 第5部 長期抵抗闘争
- 第6部 水俣病患者と新日窒労組
- 第7部 組合の日常

#### 2. 各会場の展示資料点数

資料点数は、図録に掲載した104点をベースに、各会場の展示スペースや各部の流れを考慮し、展示責任者である山本（熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員）が展示構成をおこなった。各会場の展示点数は、下記のとおりである。

- 東京展：71点
- 大阪展：104点
- 熊本展：105点 ※熊本展では、市民会議の黒旗1点が追加された。
- 水俣展：111点 ※水俣展では、パネル2点、工学校の生徒手帳1点、計算尺1点、「ちしお」全集、市民会議の黒旗1点が追加となった。

### 3. 新日窒労組 OB による展示説明の実施

資料展開催期間中は、新日窒労組 OB の方々に会場へお越しいただき展示資料説明を依頼した。展示資料説明をお願いしたのは、次の3つの理由がある。第一に、資料点数が各展示場で違いがあるために補充説明がいるということ、第二に、レッドページなどの言葉を知らない世代に対し補充説明が不可欠である、第三に、労働運動史も水俣病事件史も人と社会の歴史であると考えれば、そこに生きた人々の経験を語っていただきたいという理由からであった。

新日窒労組 OB の方々は、若い世代で60代であり、様々な用務を抱えておられ、東京や大阪に長期間滞在するのは健康上、諸事情の問題があり困難を極めた。そこで、東京展では、数名の新日窒労組 OB の方に交代で、週末や祝日、シンポジウム日で来館者数が多いと予想できる日を中心として説明を依頼した。

大阪展では、元来ボランティアスタッフによる展示説明が行われており、本展示でもボランティアスタッフに説明を依頼した。そのため、新日窒労組 OB の山下氏に、ボランティアスタッフの方々に、資料の一点一点について詳しく解説をしていただいた。

水俣展では、これまで資料整理に携わってきた新日窒労組 OB の方々を中心に説明を毎日依頼した。そのほかに、来館して下さった新日窒労組 OB の方々が展示会場に来られた方々に説明して下さった。各会場の新日窒労組 OB による説明スタッフは、「スタッフ・協力者一覧」を参照していただきたい。



東京展で新日窒労組 OB である石田氏が展示説明を行っている様子。



大阪人権博物館ボランティアスタッフの方々に新日窒労組 OB の山下氏が展示説明を行っている様子。

### 4. 映像資料公開

資料展示と平行して、新日窒労組旧蔵資料の8ミリ映像などをDVD化した映像の一部も公開した。映像の内容は、すべて無声映像ではあるものの、1962年当時としては珍しいカラー映像などが含まれ、メーデー記録や団結大運動会など労働運動で闘い抜いた労働者たちの生活の息吹を伝えるものであった。また、映像の中には、労組が水俣病患者をとらえた記録映像「怒れない世界」もあり、これを公開することで、当時、労組がどのように水俣病患者をとらえていたかを来館者自身で感じてもらえれば、という示唆があった。

東京展では、小林氏（法政大学教授）の提案で、公害事件をとらえてきたテレビ報道が、これま

で環境・公害問題の形成、変容、再構成をどのようにおこなってきたかを解き明かすべく映像シンポジウムを開催した。この映像シンポジウムは、法政大学大学院特定課題研究所 環境報道アーカイブ研究所の協力なくしては実現不可能であった。

大阪・熊本・水俣展示会場では、展示室の一角にDVDがみられるよう機材を設置し、新日本窒素労働組合旧蔵資料映像を公開した。

## 5. 資料展タイトル

なお、水俣展のみ資料展のタイトルが異なっている。地元水俣においては、企業としてのチッソ、そこに働く労働者たちの位置という大きな問題があり、水俣展のみ「新日本窒素労働組合60年の軌跡 地域とともに患者さんとともに」というタイトルに変更した。



東京・大阪・熊本版チラシ表



水俣版チラシ表

## 6. 熊本・水俣展での資料展開催時間延長

熊本展においては、資料展の開催時間を平日は20：00まで、土・日曜日、祝日は17：00までに延長し、また、水俣展では、開催時間を月曜日から金曜日まで18：00まで、土・日曜日、祝日は17：00までとした。

資料展開催時間延長の理由は次の三点である。一つには、熊本学園大学には「第二部 社会福祉学部社会福祉学科」が開設されており、社会人でも夜間学びを深めようと通学している学生が多いため、閲覧できる機会を昼間の学生同様に提供すること、二つ目には、東京展のアンケート結果に「もう少し時間を延長してほしかった」という学生の意見が多かったためである。そして三つ目には、地域の方々が仕事の後、ゆっくり閲覧できるよう配慮した。これは、本学が掲げる「地域に存在感のある大学」という精神、水俣学が「すべての成果を地元還元する学問」という理念に依拠するためである。

## IV アンケートの集計結果

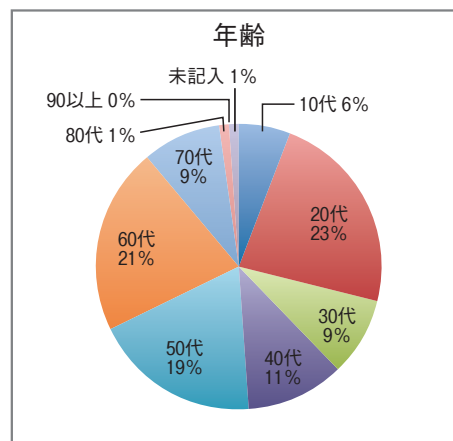
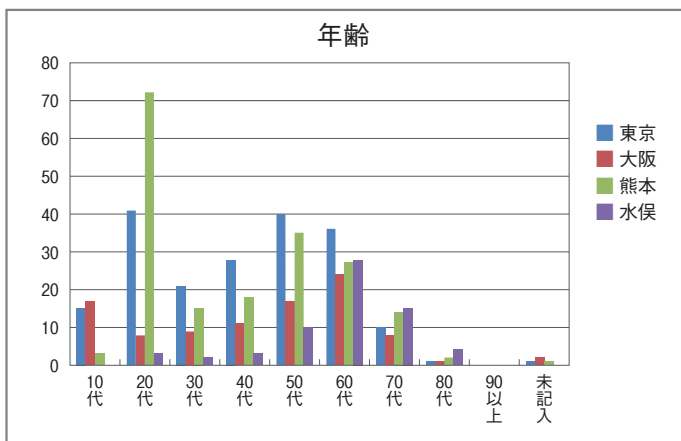
資料展開催中、資料展にこられた方を対象としてアンケート用紙をもちいた調査を実施した。アンケート内容は別紙資料2として添付した。全展示会場の来館者数は、下記のとおりである。

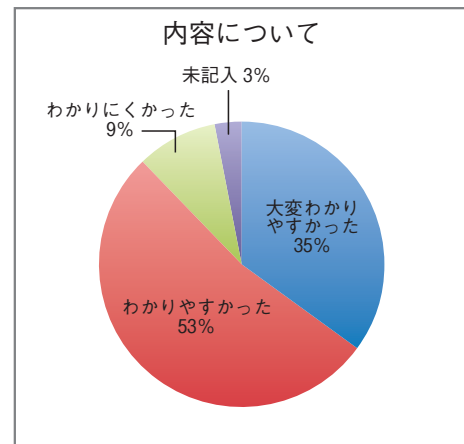
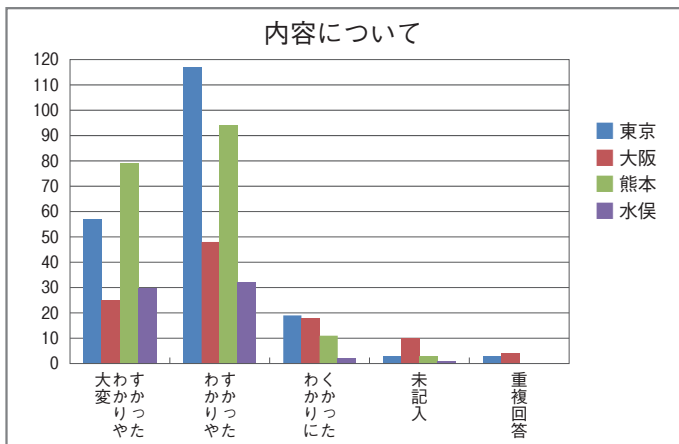
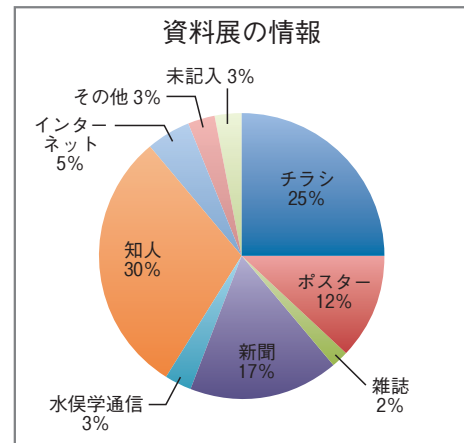
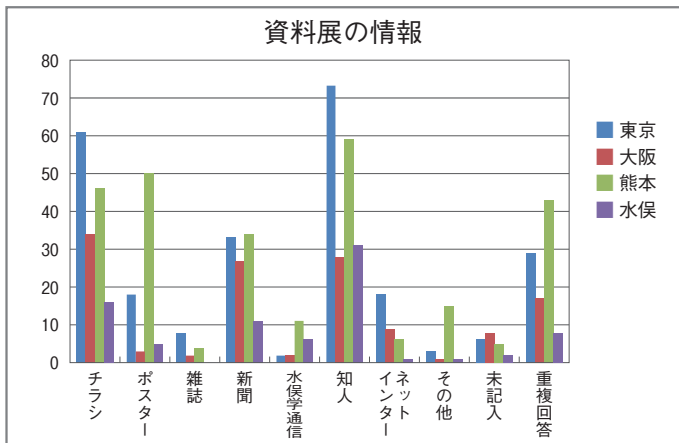
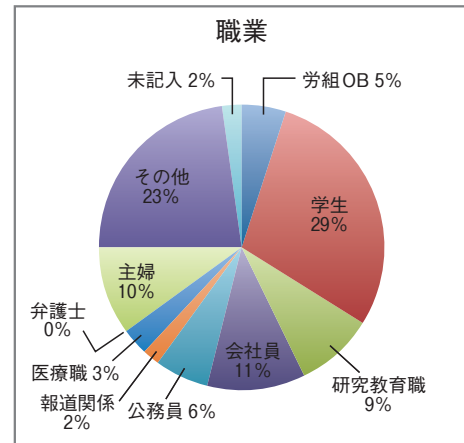
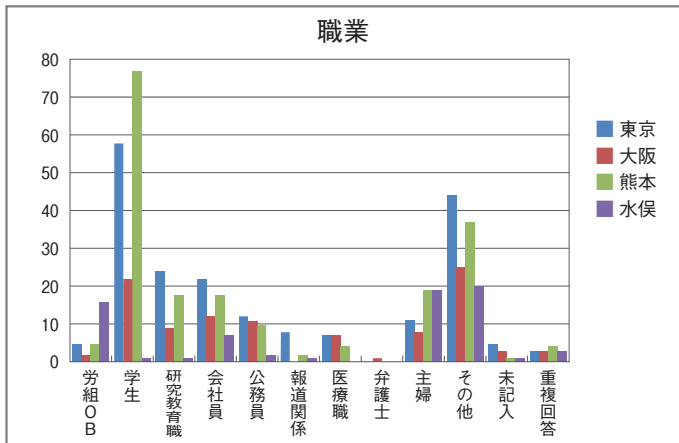
	来館者数	映像シンポジウム	シンポジウム	合計
東京展	648	52	182	882
大阪展	2,981		125	3,106
熊本展	383		137	520
水俣展	400		122	522
合計	4,412	52	566	5,030

アンケート回収数は来館者数4,412人中、542人であった。各会場のアンケート回収数は下記のとおりである。

アンケート数	東京	大阪	熊本	水俣	全体
	193	97	187	65	542

下記に示すアンケート結果は、542人を母集団として集計した。また、回答には、重複したものもあるため表示した。全展示会場における来館者の年齢、職業、資料展の情報、展示内容の反応の結果は、下記のようになった。なお、職業の項目は、当センターがシンポジウムなどを開催する時に多い職業を列記した。弁護士の来館者数は、大阪で1名であり、全体で集計すると0%となったが、そのまま表記した。





「展示内容はわかりやすかったですか」という質問項目では、「大変わかりやすかった」と「わかりやすかった」が合計88%にのぼり、以下の反響があった。なお、各会場でのアンケート結果抜粋は、別紙資料3-1、2、3、4として添付した。

- ・当時の人々に直接語りかけてもらったような実感があった。
- ・環境、公害という切り口で説明されることが多い水俣病を労働運動の観点からとりあげているのが新鮮であった。
- ・資料がコンパクトにまとまっており、チッソの会社の体質がよくわかった。
- ・資料をみて、水俣病とは単に病気としてあるのではないと感じた。

- ・ 工員たちの生活や思いを知ることで、水俣病問題を違った視点から見ることができた。
- ・ 歴史の一部という認識から少し身近なものになった。
- ・ これだけの貴重な資料を残してもらってありがたい。
- ・ 資料などにとってもわかりやすい説明や時代の流れが順序よくわかりやすかった。
- ・ 常設展示をしてほしい。
- ・ 水俣病事件以前からの水俣の産業復興や労働組合の歴史の様子がよくわかり、水俣病の時代背景を知るための勉強になった。

また、「わかりにくかった」点として、最も多かった意見を下記に抜粋した。

- ・ キャプションの字が小さい。
- ・ 順路がわかりにくい。
- ・ レッドパーズなどの言葉の説明をしてほしい。
- ・ 資料を手にとってみたかった。
- ・ 年表があったほうがわかりやすかった。
- ・ 資料の量が少ない、展示スペースが狭い。
- ・ もう少し写真を展示してほしい。
- ・ 「恥宣言」以降、組合がどうなったかの資料がほしかった。前史が長すぎる。

資料点数、キャプションなど東京展の展示スペースを基準としていたため、「キャプションの字が小さい」「資料の量が少ない」という指摘が出るであろうことは予見できたことであったが、展示バランス、構成など考慮するとやむを得ないことであった。「キャプションの字が小さい」という意見は東京展で多く寄せられたため、大阪展では、展示ケースの奥行きが広く、より字が見えにくくなると判断し、展示ケースの壁にけるキャプションの文字を大きくプリントしたものを使用するなどの工夫をおこなった。しかし、大阪、熊本、水俣の会場でも同様の意見があった。アンケート結果をみると、来館者の約半数は50～80歳代であり、小さな文字が見えにくい状況も今後考慮しなければならない今後の課題である。

また、「資料の量が少ない」「もう少し写真を展示してほしい」という意見に対しては、水俣展において、展示バランスが崩れない程度に若干のパネル、資料の補充をおこなった。上記意見にもある年表については、準備段階で作成予定であったが展示スペースを考慮し、『新日本窒素労働組合60年の軌跡』（別紙資料1-2）のなかに新日窒労組と水俣病事件に関する関連年表を掲載するのみにとどめた。

「順路がわかりにくい」という意見は、東京展でもっとも多く見られた。受付で、順路の案内を直接説明し、小看板に急遽手書きで順路表示をするなどの対策はとったものの、この意見が東京展では多かった。大阪展では、元来、博物館という機能があるため、このような意見は寄せられなかった。以上のことを検討し、熊本展、水俣展の展示構成の流れに沿って閲覧できるよう山本が再構成し、順路表示もわかりやすく矢印で表記した。そのため、熊本展、水俣展では、順路がわかりにくいという意見はなく問題解消ができた。

「『恥宣言』以降、組合がどうなったかの資料がほしかった。前史が長すぎる。」という意見は、全展示会場の一部の方からいただいた。新日窒労組 OB の説明日でない日に来館された方からの意見が多くみられた。この方々には、資料展開催の目的を説明し、ご意見を伺った。

アンケート結果から、来館者がどこからこられたかということも分かった。東京展には、都心のみならず、岩手県、新潟県、茨城県、千葉県、埼玉県、神奈川県、長崎県、熊本県などから出向いて来られた方が多くみられた。大阪展でも、兵庫県、福岡県、京都府、山梨県、愛知県、徳島県、福岡県、滋賀県などからの来館者が多く見られた。熊本では、福岡県からの来館者が多かったが、京都府、鹿児島県からも足を運んでいただいた。また、水俣展では、熊本展を行っていたにもかかわらず、熊本市内からの来館者が水俣市内に次いで多く、他県からは福岡県、鹿児島県が多かった。

「本展示会の情報をどのように得たか」という項目では重複回答が多く、なかでも知人、チラシから情報を得たという回答が多かった。共催者からの広報活動は、通常の配布先だけでなく公民館・学校なども追加したチラシ配布、インターネット上での案内をおこなっていただいた。また、共催者の協力のほかに、各関係諸団体、学会関係者、労組 OB 諸団体を通じて多くの方に広報していただいた。そのため、「各諸団体のホームページをみて」という意見も多かった。水俣学研究センターの広報活動としては、ホームページ・水俣学通信で資料展の案内を掲載するほか、各新聞社にプレス資料を事前配付し、記者会見もおこなった。上記の広報活動のおかげで、各社の新聞で大きく報道され、新聞をきっかけとして来館する方も多くみられた。なお、掲載された記事は、別紙資料 4 として添付している。

「今後、水俣学研究センターに期待すること」という項目に対しては、最も多かった意見を下記に抜粋した。

- ・ 研究結果を、全国だけでなく世界に発信してほしい
- ・ センターが存在し、活動を継続しつづけていくこと
- ・ 次世代への環境教育および啓発
- ・ 水俣学を国際的なものに広めてほしい
- ・ 水俣病問題の普遍性を知らせ続けること
- ・ 地域活動のコーディネーター
- ・ 広報活動
- ・ 情報提供
- ・ 貴重資料の収集および保存
- ・ 熊本以外での水俣学講義、資料展やシンポジウムの開催
- ・ 本や資料の復刻、書籍の刊行

特に多かった意見は、「活動を継続してほしい」というものであった。これらの意見は、今後の研究活動にいかしていきたい。

このほかの意見として、「水俣学研究センターの概要に触れて、それに留まらない展開をしていることに気付かされました。それは、地域問題であり、企業の社会的責任の問題、医療の問



題、福祉の問題等々です。水俣学研究センターが、水俣の重く苦しい経験を土台に、そうした地方自治や市民参加を目指しながら新たな展開をしている様に思います。」という意見もあった。今回の全国巡回資料展は、水俣学研究センターの存立の意味をあらためて確認するものでもあったといえる。ここで、アンケートにご協力いただいた方々に御礼を申し上げたい。

## V 財政報告

全国巡回資料展に要した主な経費は、下記の通りである。

費目	金額	内訳		備考
展示設営費用	1,362,847	熊本	546,000	
		水俣	816,847	
パネル作成	387,555			キャプション、 写真パネル
展示品写真撮影	420,000			
図録印刷費	1,942,500			
チラシ印刷費	307,650	東京・大阪	181,650	21000枚
		熊本	67,200	5000枚
		水俣	58,800	2500枚
ポスター印刷費	217,560	東京・大阪・熊本	120,960	1800枚
		熊本（追加）	50,400	200枚
		水俣	46,200	100枚
会場費	143,760	水俣市婦人会館	90,000	作品展 講演会
		水俣市公民館	36,980	
		水俣市公民館	16,780	
運搬費	235,830	作業人件費	104,000	
		車両費	112,100	
		荷造材料費	8,500	
		消費税	11,230	
合計	5,017,702			

## VI スタッフ・協力者一覧（敬称略・順不同）

本資料展での責任者は下記の通りである。

総括責任者 花田 昌宣（熊本学園大学教授・水俣学研究センター事務局長）

展示責任者 山本 尚友（熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員）

また、本資料展においてご協力いただいた方々およびスタッフは下記の通りである。表記は、所属団体ごととした。ここに厚く御礼を申し上げたい。

東京展：五十嵐 仁（法政大学大原社会問題研究所所長）

相田 利雄（法政大学大原社会問題研究所副所長）

鈴木 玲（法政大学大原社会問題研究所教授）

榎 一江（法政大学大原社会問題研究所准教授）

若杉 隆志（法政大学大原社会問題研究所事務室主任）

柴田 光代（法政大学大原社会問題研究所事務嘱託）

高橋 芳江（法政大学大原社会問題研究所事務室臨時職員）

小林 直毅（法政大学社会学部教授・大原社会問題研究所運営委員）

藤田 真文（法政大学社会学部教授）

金山 喜昭（法政大学キャリアデザイン学部教授）

笹川 孝一（法政大学キャリアデザイン学部教授）

藤田 直人（法政大学資格課程助手）

菅原 真悟（法政大学資格課程助手）

山本 洋（法政大学資格課程実習助手）

石田 博文（新日窒労組 OB）

糸田 憲夫（新日窒労組 OB）

緒方 紀明（新日窒労組 OB）

山下 善寛（新日窒労組 OB）

山平 勝利（新日窒労組 OB）

山本真理子

原田 正純（熊本学園大学教授・水俣学研究センター長）※2010/1/1より水俣学研究センター研究員・顧問

宮北 隆志（熊本学園大学教授・水俣学現地研究センター長）

花田 昌宣（熊本学園大学教授・水俣学研究センター事務局長）※2010/1/1より水俣学研究センター長

山本 尚友（熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員）

田尻 雅美（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）

井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）

大阪展：秋定 嘉和（大阪人権博物館館長）

小頭 芳明（大阪人権博物館常務理事）

石橋 武（大阪人権博物館事務局長）

朝治 武（大阪人権博物館学芸員）

吉崎 進（大阪人権博物館会計課副主査）

小島 伸豊（大阪人権博物館事業推進室長）

仲間 恵子（大阪人権博物館学芸員）

吉村 智博（大阪人権博物館学芸員）

文 光輝（大阪人権博物館学芸員）

松永 真純（大阪人権博物館学芸員）

村上 紀夫（大阪人権博物館学芸員）

北口 修司（大阪人権博物館学芸員）

大阪人権博物館ボランティアスタッフの皆様

山下 善寛（新日窒労組 OB）

山平 勝利（新日窒労組 OB）

山本真理子

原田 正純（熊本学園大学教授・水俣学研究センター長）

宮北 隆志（熊本学園大学教授・水俣学現地研究センター長）

花田 昌宣（熊本学園大学教授・水俣学研究センター事務局長）

山本 尚友（熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員）

田尻 雅美（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）

井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）

熊本展：石田 博文（新日窒労組 OB）

糸田 憲夫（新日窒労組 OB）

江口 和伸（新日窒労組 OB）

江口 睦美（新日窒労組 OB）

緒方 紀明（新日窒労組 OB）

山下 善寛（新日窒労組 OB）

山平 勝利（新日窒労組 OB）

山下紀久子（新日窒労組 OB）

山本真理子

原田 正純（熊本学園大学教授・水俣学研究センター長）

花田 昌宣（熊本学園大学教授・水俣学研究センター事務局長）

宮北 隆志（熊本学園大学教授・水俣学現地研究センター長）

山本 尚友（熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員）

田尻 雅美（熊本学園大学水俣学研究センター研究助手）

井上ゆかり (熊本学園大学水俣学研究センター研究助手)  
林田 利子 (熊本学園大学高度学術研究支援センター事務室室長補佐)  
川邊 裕子 (熊本学園大学高度学術研究支援センター事務室)  
石坂美代子 (熊本学園大学高度学術支援センター嘱託事務)  
野田希美子 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト職員)  
木谷 綾子 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト職員)  
清永佐由里 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト職員)  
船元亜梨沙 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト)  
渡辺 美恵 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト)

水俣展：糸田 憲夫 (新日窒労組 OB)  
石田 博文 (新日窒労組 OB)  
緒方 紀明 (新日窒労組 OB)  
高橋 幸一 (新日窒労組 OB)  
徳永 常喜 (新日窒労組 OB)  
山下 善寛 (新日窒労組 OB)  
山平 勝利 (新日窒労組 OB)  
山本 達雄 (新日窒労組 OB 家族) ※写真提供

親交会

山本真理子

原田 正純 (熊本学園大学教授・水俣学研究センター長)  
花田 昌宣 (熊本学園大学教授・水俣学研究センター事務局長)  
宮北 隆志 (熊本学園大学教授・水俣学現地研究センター長)  
山本 尚友 (熊本学園大学教授・水俣学研究センター研究員)  
田尻 雅美 (熊本学園大学水俣学研究センター研究助手)  
井上ゆかり (熊本学園大学水俣学研究センター研究助手)  
石坂美代子 (熊本学園大学高度学術支援センター嘱託事務)  
大澤 愛子 (熊本学園大学高度学術支援センター嘱託事務)  
榮永 伴子 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト職員)  
吉本 千恵 (熊本学園大学水俣学研究センターアルバイト職員)

文末となったが、本資料展を開催するにあたり、事前準備、全会場の搬入・搬出を引き受けていただいた山下善寛氏と山平勝利氏には特にお世話になった。敬意を表するとともに厚く御礼を申し上げたい。

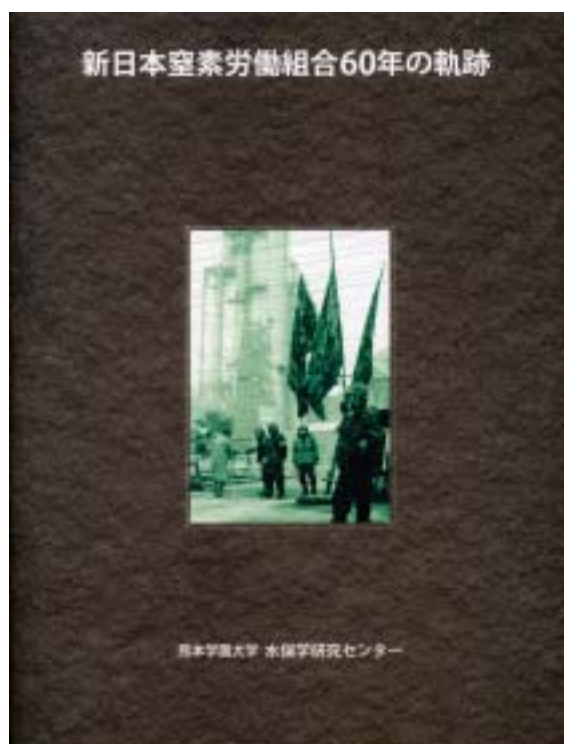
また、来観していただいた多くの方々に感謝申し上げます。

別紙資料1-1



『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』  
熊本学園大学水俣学研究センター 2009年3月

別紙資料1-2



『新日本窒素労働組合60年の軌跡』  
熊本学園大学水俣学研究センター 2009年10月

## 「新日本窒素労働組合 60 年の軌跡 –水俣病とむきあつた労働者–」

## アンケート用紙

資料展をご覧いただき誠にありがとうございました。

下記の表にご記入の上、お帰りの際に受付へご提出ください。今後、参考にさせていただきたいと考えております。なお、本アンケートに書いていただいた情報は、水俣学研究センターの参考データとしてのみ使用し、それ以外では一切使用いたしません。また、プライバシーに対しては細心の注意を持って取り扱いますのでご協力して頂きますようお願い致します。

年 齢	10代	20代	30代	40代	50代
	60代	70代	80代	90代以上	
職 業	労組OB	学生	研究教育職	会社員	公務員
	報道関係	医療職	弁護士	主婦	その他 ( )
資料展の 情報に ついて	この資料展は、どのようにお知りになりましたか。				
	チラシ	ポスター	雑誌	新聞	水俣学通信
	知人	インターネット			
	・もしよろしければ知人の方のお名前をお教えてください ( ) 様				
	・インターネットは何をご覧になりましたか ( )				
展示内容 について	展示内容は分かりやすかったですか				
	大変わかりやすかった	わかりやすかった	わかりにくかった		
	・今後の参考としますので「わかりにくかった所」を具体的にお教えてください ( )				

<p>資料展 の感想</p>	<p>資料展全体を通して、ご意見・ご感想をご自由にお書き下さい。</p> <hr/>
<p>水俣学研究 センターに 期待すること</p>	<p>今後、熊本学園大学水俣学研究センターにどのような活動を期待されますか。</p> <hr/>
<p>案内の ご希望</p>	<p>次回から水俣学研究センターの活動案内を希望なさいますか</p> <hr/> <p>希望する ・ 希望しない</p>
<p>連絡先</p>	<p>案内を希望される方は、下記にご連絡先をお願いします。</p> <hr/> <p>(住所) 〒</p> <p>(氏名)</p>

ご協力ありがとうございました。

熊本学園大学水俣学研究センター

別紙資料3-1 東京展アンケート結果抜粋（表記は原文のまま掲載した）

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
10/30 (金)	30代	研究教育職	チラシ	わかりやすかった	動線がもうすこし分かりやすいとよかったです。スペースの関係もあって難しいとは思いますが。	これまでどうしても企業を1つの単位として水俣をめぐる問題を考えがちでしたが、そこを分け入って問題を分節化して捉える機会となりました。ありがとうございました。	大変な作業だとは思いますが、資料の整理・公開を進めて頂ければと存じます。
	50代	研究教育職	チラシ インターネット (大原社研)	大変わかりやすかった	順路を指示した方がよかったです。第一部を後から見たので。	水俣病と患者の運動については、本を読んだり話を聞いたことはあるが、労働組合関係の資料をみたのは初めてである。労使関係を勉強しているので、水俣病と労働運動との関係についてもう少し学んでみたいと思った。	学際的視点から水俣病、企業、労働者について、さらに深めた研究を期待したい。
11/1 (日)	50代	研究教育職	チラシ	大変わかりやすかった		水俣病および水俣という地域が抱えてきた問題に対し、新しい視野を与えられた展示でした。折りをみて資料の現物を見に行きたいと思っています。	
11/2 (月)	60代	労組OB	新聞	わかりやすかった、わかりにくかった	1～6部の順路がわかりにくかった	もう少し解説（機関紙などの文字が小さく読みづらいので要約したもの、第一、第二組合の果たした役割）や歴史的背景、当時の労働者の声があったらよかったです。労働組合として当然果たすべき役割を果たしていたこと、感銘しました。	
11/3 (火)	40代	その他 (団体職員)	インターネット (熊本学園大)	わかりやすかった	年表のようなものがあつたらよかったです。	安賃闘争と、その後の水俣病被害者支援の関係が分かった。貴重な資料を見ることができました。ありがとうございます。	水俣病講義のネット配信ありがとうございます。今後も継続していただけることを期待しています。
	50代	その他 (社会保険労務士)	新聞	大変わかりやすかった		静かな迫力を感じました。実際に労組活動に携わった方々からお話を聞くことができ、上京してよかったです。いい文化の日になりました。	社会から水俣病問題の記憶が薄れないよう硬軟とりまぜた方法で各界に啓発活動をしていただければと思います。



月日	年齢	職業	資料展の 情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに 期待すること
11/3 (火)	40代	その他 (労働 団体)	知人	大変 わかりや すかった	できれば日、英、両 方あるといいですね。	新日窒の闘いがあったこと を知らませんでした（恥ず かしながら）。 このような機会に恵まれ、 また水俣の一部を学ぶこと ができ感謝です。やはり同 世代の組合分裂攻撃は同じ ですね。闘いぬいてきたこ とを次の世代に伝えていく ことが私たちの課題と思 います。頑張ります。	継続してこのような 企画をお願いします
11/4 (水)	10代	学生	新聞 知人	わかりや すかった	パネルの字がもう少し 大きいとありがた かったです。	組合内の様々な活動、当時 の時代背景などがわかりま した。よくこれだけ資料が みつかったなあと驚いてい ます。	水俣学をより広めて 欲しい。
11/5 (木)	20代	学生	知人	わかりに くかった	文字小さい、順路わ かりにくい、資料な んなのかわかりにく い、地図どこかわか りにくい	労組が団結してチッソ内部 からの運動があったことは 知られておらず、斬新な展 示だった。ただ、水俣病前 の労組運動について詳しく ふれていすぎて水俣病後の 資料が手薄に感じた。	広報
	20代	学生	知人	わかりに くかった	順路がわかりづらく、 話の流れもよくわか らなかった。	水俣といえば水俣病、水俣 病学の印象が非常に強かつ たが、水俣の人々の生活に スポットをあてることで、 水俣学、というものが存在 するということに気付いた。 病理学的な視点に捉われず、 庶民の生活、文化（生活誌、 文化誌）に目を向けること 全てが、大切なのだと思っ た。水俣学研究センターの 存在を知らなかった。	
	10代	学生	知人	わかりや すかった		授業時間の関係で、18：30 までとかだとありがたいと 思いました。	
11/7 (土)	20代	学生	知人	わかりや すかった		資料展の目的にもよるとは 思いますが、ある程度知識 や関心がある人には興味深 い展示だと思いました。し かし、そうでない人にとつ ては少し分かりにくいかも しれません。もう少し水俣 病問題全体が分かる資料も あっても良いと思います。	より経済的な側面か らの分析、報告。
	40代	報道関 係	チラシ 新聞	大変 わかりや すかった		現物を見ることができて、 当時の人々に直接語りかけ てもらえたような実感があ りました。巡回展も大切で すが、ぜひ常設展もつくつ てほしいと思います。	

別紙資料3-2 大阪展アンケート結果抜粋（表記は原文のまま掲載した）

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
11/17 (火)	40代	会社員	新聞 (朝日)	わかりやすかった	展示物まで距離があり（ガラスケースの中の展示でしたので）文字が小さく、読みにくかったです。	何回みても心が揺れます。組合の側からの視点が新鮮でした。	ほんとうの犠牲者の救済支援。公害のむごさ、ひどさの広報。
	50代	会社員	チラシ	わかりやすかった	ガラスの中の資料が遠い。	組合として、自社の「恥」宣言は大変な決断だけに、こうした事実をより広める必要があると思いました。自身の安定した生活と正義の間で心がゆれるのはいつでもだれでも同じと思いますが、すばらしい決断と思います。	
11/18 (水)	70代	弁護士	新聞	わかりやすかった	水俣病に取り組む前の労働組合の素晴らしい取り組みと、家族・地域と連帯した文化・スポーツ活動の取り組みを、初めて知る機会を得て感動しました	資料の散逸を防ぎ、収集されることを希望します。	
11/19 (木)	60代	労組OB その他 (パート)	新聞 (朝日)	大変わかりやすかった、わかりにくかった（面もありました）	実例、旗とか現場の表示物に年代が入っていないのがありましたので、表示がありましたらよりわかりやすいです。	大変感心しました。日本窒素労組の恥宣言のことは、全く知りませんでした。出展された関係者のみなさまに大変感謝します。第一組合が消滅したことに残念です。	今後も終わることなく活動を続けて下さい。次回の資料展・講演会のイベントがありましたらご連絡下さいれば大変幸いです。
11/20 (金)	50代	研究教育職	チラシ	わかりやすかった	第7部の所、日常の労組活動、写真があればわかりやすかったと思います。	資料点数、コンパクトにまとまっていて、チッソの会社の体質がよくわかりました。今の人に、合化労連とか労働組合の組織関係、オルグという言葉はわからないのでは。あと三池斗争のことなど、すこし関係に触れてもらえればよかったです。	これからの行政などの水俣病問題に対する姿勢も伝えていってほしいと思います。
	30代	会社員	チラシ 知人	わかりやすかった	水俣病についての略史や、簡単な説明があると、背景がわかりやすい人でも、展示が見やすくなるかと思いました。	水俣や組合活動において、水俣病支援に関わる際にも、安賃闘争の影響が大きかったということを感じました。会社に在籍して水俣病支援を行うというのは、想像できないくらい大変なことだったのでないかと思えます。原田先生と山下さんのシンポジウムを楽しみにしています。山下さんの直筆の手紙は、当時のことが伝わる貴重な資料だと思います。	

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
11/20 (金)	30代	会社員	チラシ 知人	わかりやすかった	展示解説（奥の壁）の字が小さく読みづらかったです。	当時の人々の生活の様子がわかり（価格表）興味を持って見る事ができました。写真などがもう少しあれば（残っているのであれば）見やすいと思います。パソコン、ワープロのない時代の人々の文字の書き方、文体は、今ではなかなか見ることが出来ないで、大切に保存されて、こうして活用されることは良い機会だと思いました。	
11/21 (土)	40代	研究教育職		大変わかりやすかった	説明文の文字サイズがもう少し大きければ読みやすいのでは。	労働組合としての幅広い活動全体がよく展望されていると思います。日本の労働運動の一面をたどることができました。ただ、今回の企画のタイトル名に関わる展示がもっとあったらよかったですと思います。	水俣病に関しては医学的・法的な諸問題として扱う面が強いと思うのですが、社会科学的なアプローチを現在より以上に人々に知ってもらい必要があると思います。かつての色川大吉氏のような研究活動について今後の展開を期待しています。大原社研との連携にも期待しています。
11/26 (木)	70代		知人	大変わかりやすかった		1960～80にかけて鉄鋼職場で反斗争の一端を担った労働者の一人として往時を省り、大変参考になった。	企業と公害について更に学習を深めたい（労働組合と公害患者の関係）
11/28 (土)	40代	研究教育職	チラシ	わかりにくかった	なぜ労組が「終わった」のかについて。過去の一時期を切り取ったもののようにみえてしまう。	労働者の「身分」を利用した分断、地元の貧しさにつけ込む会社の手法などは、まさに“今日的”問題でもある。歴史とせずに“闘争”を語り続けてほしい。	
	50代	研究教育職、その他（司書）	チラシ ポスター 知人 インターネット（当館のメールマガジンで何度も流しました）	大変わかりやすかった	ただし、労働運動をあまり知らない人々にとって少々説明が必要な部分があるとも思いました。「ピケを張る」ということの意味など想像しにくいかも、と危惧しました。	よくこれだけ資料を残しておられたものと関心しました（当館にも少しですがチツソ労組関係の資料があります）。ただし、解説のパネルの文字が小さくて読みづらかったです。また、パネルが遠くて、写真などがみにくかったのも難ありかと思いました。労組の「恥宣言」には目頭が熱くなりました。すばらしい労組ですね。当館のブログにも書きます。	これを機会にぜひコラボレーションを、と思います。当館は小さな小さな図書館ですが貴重な資料を所蔵していますのでぜひ連携をとらせていただきたいと存じます。

別紙資料3-3 熊本展アンケート結果抜粋（表記は原文のまま掲載した）

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
12/7 (月)	30代	学生 研究教育職	ポスター 水俣学通 信人	わかりやすかった		チッソ組合の運動について、事の起りからその流れまで一連を通して知ることが出来、水俣病のまた新たな一面を知ることが出来ました。また、貴重な資料の数々がこんなにも残されていることにも驚きました。こうした貴重な機会を数カ所の会場で開催されること、大学内で行われることを嬉しく感じるとともに、より多くの人に触れてほしいと思いました。	
12/12 (土)	30代	研究教育職	チラシ	わかりにくかった	一カ所だけ「合化労連」が分からなかった。	非常に貴重な資料をよくまとめたなと思った。1点1点をよく観察したが、作品には手を触れられないので、目録を作っていただき助かった。日本の労使闘争史を思う時、こうしたノウハウは今も、少しずつ成長させられてきたのであろうと思われた。次にこれは牙をむくのはいつなのか、あるいは既に穿かれているのか、とも思った。	これからも水俣の多様な側面を問いかけていただきたい。
12/13 (日)	60代	研究教育職	チラシ 新聞	大変 わかりやすかった		当事者としての労組の資料が公開されることは、それだけでも貴重です。民間会社勤務の頃、労組役員を務めていたこともあり、ある種の感激と共に拝見しました。感謝しています。	地元国立大学が荷負い得なかった研究活動を進めておられることに敬意を表します。今後も、研究、公開を続けてください。
	60代	主婦	チラシ	大変 わかりやすかった		これまで何度となく水俣を訪れ、水俣病についてわかってきたことがあります。“水俣病の患者さん”対“チッソ”という構造の中で見てきた事が多かったと思います。地元の方々から聞く言記の中で、時に、チッソの組合運動の部分になると、よくわからない事もありましたが、今回の企画をみて、初めて対立軸が1つでないことが理解出来ました。水俣病を知ることの中で、大変、大切な視点に気付かせてくれた資料展であったと思います。会場に来てみて良かったと思っています。	今回の資料展は、組合員同志、闘いから水俣病への支援に至るまでの人の心の変化を伝えてもらいました。全国各地でさらに拡大させて下さい。水俣病に関して、まだまだ知らないことの多さを実感。いろんな角度からご提示下さい。

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
12/14 (月)	80代	その他	新聞	大変 わかりやすかった		手書きの資料などもあり、驚きました。「さいれん」は復刻されているのでしょうか。みたいです。	
12/16 (水)	20代	学生	その他 (学校で 通りかか って入っ てみた)	大変 わかりやすかった		写真や実物が置いてあり分かりやすく、熊本の人として知っておかなければならない事実だと再確認できた。	私たちにもできることがあれば何か関わりたい。これからも熊本各地や四大公害が起こった地を中心に水俣病のことを知らせて欲しい。
	70代	その他 (年金 生活者)	チラシ ポスター 知人	大変 わかりやすかった		展示の一コマ一コマを大きな感動を持って見せていただきました。表示してある年代と自分自身の歴史を振り返り、社会的な問題に何も関心を持たなかった頃から、自分も組合員として学習の場を持ち、大きな関心を寄せるようになって、少しは知っているつもりでいました。それが大きな間違いであったことを、この展示で思い知らされました。親日室労組の資料が水俣学研究センターに寄贈されたこと、それを日本中に訴える資料とされたことを大変有り難く感謝し、これからもこのような学習の機会を捉えて勉強していかねばと思いました。	患者さん達も、あの頃を知る人たちも、どんどん高齢化していくなかで、若い世代にしっかりと継承していくための活動を期待しています。
	30代	学生	ポスター	大変 わかりやすかった		何度も水俣へは足を運び資料館も見学してきたが、ここでしか見れないものも数多くあったように思う。手書きでの書類などがきれいな形で保管されていたことで、この場所にお目見えすることができたのだと感じた。その数々の保管されていた品々には水俣のその時を思わせるものであり、実に興味深いものであった。	
12/18 (金)	20代	学生	その他	わかりやすかった	基本的には、理解しやすい内容だと思ったのですが、「ピケ」などといった単語の補足説明があれば良かったなと思いました。		

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
12/19 (土)	50代	研究教育職	チラシ	大変わかりやすかった		労組の運動については、おおよそ知っていたが、それを生の資料で辿ることができて大変有意義だった。資料の半分でもいいから、常設展示できるような場所があればと思う。	頑張ってください。敬意を抱いております。
12/20 (日)	20代	学生	ポスター	わかりやすかった		水俣病の問題においてだけでなく、労働者に対するチッソの企業としてのあり方に問題があったということを知ることができました。会社の外からは見えにくい企業の体質というか姿勢について明らかにする点において大変意味のある展示であると思います。	
	40代	医療職	チラシ 水俣学通信 知人	大変わかりやすかった		チッソの内部に、自らの仕事で人の命をうばった罪悪感に苦しんで闘ってきた方々のすばらしさに感銘を受けた。また、水俣病事件以前からの水俣の産業振興や労働組合の様子がよくわかり、水俣病の時代背景を知るための勉強になりました。	
	30代	研究教育職	チラシ	大変わかりやすかった		当時の労組員を中心とする水俣の生活者の様子がよくわかり興味深かった。	このセンターが存在し、活動を続けていくこと自体が非常に大切なことだと思います。
	40代	医療職	チラシ 水俣学通信 知人	大変わかりやすかった		チッソの内部に、自らの仕事で人の命をうばった罪悪感に苦しんで闘ってきた方々のすばらしさに感銘を受けた。また、水俣病事件以前からの水俣の産業振興や労働組合の様子がよくわかり、水俣病の時代背景を知るための勉強になりました。	

別紙資料3-4 水俣展アンケート結果抜粋（表記は原文のまま掲載した）

月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
1/8 (金)	40代	その他	ポスター	わかりやすかった		組合のその後（解散に至るまで）の経過説明パネルがあるとよかったな。	
1/9 (土)	50代	その他（自営業）	新聞	わかりやすかった		公害発生企業の労働組合が患者（被害者）とともにどのように歩んだのか。企業（会社）側との斗い、第二組合との斗いと厳しい曲面に立ち向かいつつ組み込んだ軌跡をうかがい知れた。元委員長長の「転向」は衝撃である。	被害者の方々が速やかに救済されるよう大きな力になればと思います。
1/14 (木)	50代	公務員	水俣学通信	わかりやすかった	年表があればよかったです。	伯父が巻いていたハチマキは、赤だったなあと思い出しました。あれは安賃闘争だったのですね（S40年代頃？）。	
	50代	公務員	インターネット（イッペコッペ）	わかりやすかった		当時の資料を見ることが出来て改めて安賃闘争の大変さを感じた。水俣のもやい直しの一つであり、水俣の歴史を知るうえで大変重要な資料である。また、社員の皆様の作品に対して文化レベルの高さにも驚きました。このような企画を設けていただき感謝とお礼を申し上げます。多くの市民に呼びかけたいと思います。	水俣の資料は、行政で保存することが重要と考えます。しかしながら、現実に来ていない状況を考えると熊本学園大学に資料の保存・整理をお願いします。
	70代	主婦	知人	わかりやすかった	一つ一つ読むヒマがなくサーっと回ったから。	大変よく整理され見やすかった。	
1/15 (金)	60代	主婦	新聞	大変わかりやすかった		組合の結成当時の状況や日常生活の実態と生き生きとした実態（家族の方を含めて）を感じる事ができました。会社の労働者に対する攻撃のひどさは今も昔もかわらないのだなあと思いました。展示会に来て本当によかったと思います。	
1/16 (土)	20代	会社員	チラシ	大変わかりやすかった	奥の展示物の字が少し小さく、見えにくかったです。目をこらせば読めるので問題ないですが。年配の方はつらいかも…？。できれば、もう少し大きいと読みやすいです。	チツソ、苦海浄土、水俣病…キーワードとして知っていたことが労働組合の歴史と活動を知ることにより立体的に理解できた気がします。今日は来てよかったです。ありがとうございました。	

月日	年齢	職業	資料展の 情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに 期待すること
1/16 (土)	50代	会社員	チラシ 新聞	わかりやすかった		会場がわかりにくい。一般の人が自由に見学を訪れる場所がよかったのではと思う。婦人会館は、はじめて行きました。展示品は大変貴重な資料もあり生前の父を思い出しました。資料は、ループが用意されていたらもっとわかりやすかったでしょう。照明は暗いし、字は細かいし。	
	60代	その他	ポスター	わかりやすかった		激しい時代の流れ、その中で生きた人々をしばし思わせていただいた。	
1/18 (月)	20代	学生	チラシ ポスター	大変わかりやすかった		労組の文化運動の資料を興味深く拝見しました。東京展も拝見しましたが、今回の水俣展では映像も見ることができ、充実した展示となっていると感じました。ありがとうございました。	
1/19 (火)	60代	その他 (教員)	ポスター	わかりやすかった		教員初任して1年後、安定賃金闘争のオルグとして参加したことがあり、なつかしい思いをしました。	
1/20 (水)	50代	その他 (老人福祉関係)	知人	大変わかりやすかった		さいれん1931号記載の「今まで水俣病と斗い得なかったことは、正に人間として恥ずかしいことであり、心から反省しなければならない」は、涙があふれる。老兵だが、下肢不自由(身障者)の身を投げうって頑張ろう。	小さな水俣ですが奥が深い…人間の心の歴史がある町だと水俣学のなかで感じています。自分だけでは、こんな分析できません。ありがたいことです。これから水俣のこと、よろしく願います。私の中には、上記のストライキのことで一杯だった頃、水俣病が発生していたことを知らなかった！ということも自分の中の記憶としてあります。
	60代	その他 (農業)	ポスター	大変わかりやすかった		組合活動-労働者の-が実に肝のすわった全貌がよく露呈されて佳かった。	水俣病の負の遺産をテッテイして追求し尽くし、将来の正コクを射ぬく為に役立つようご尽力を今後ともつづけていていただきたい。



月日	年齢	職業	資料展の情報	展示内容	わかりにくかった所	感想	センターに期待すること
1/20 (水)	60代	主婦	知人	わかりやすかった		小さい頃、父が組合員として頑張っていた姿が思い出されました。なつかしい思い出でした。	公開講座や講演などはこれからも期待しています。
	60代	労組OB	水俣学通信	大変わかりやすかった		チッソの創立、創業の歴史や組合の結成から解散までのいろんな出来事をそれなりに知っていましたが、今回の資料展をみて一層理解を深めることができたと思っています。DVDの映像は往時の記憶がよみがえってくるようでした。	
1/21 (木)	60代	その他 (年金生活者)	新聞	大変わかりやすかった		労働組合の斗いがいかに正しかったのか証明された(再確認)。	今後とも活動を続けていって下さい。
	60代	労組OB	チラシ	大変わかりやすかった	労働組合の歴史と水俣病への取り組み	大変良くできた展示会になっていたと思っています。	
	20代	会社員	知人	わかりやすかった	古い資料に書いてある言葉を訳したものがあればもう少しよかった。	組合の人はすごい。最初に入ったときに来ていたおばあちゃんが、「なつかしか、なつかしか」と言っていて、写真の人物の名前をあげたり、闘争の時の大変だったこと、一家総出で参加したことを話してくださったり、後からやってきた人もOBやその家族で、本当に地域を巻き込んだ組合なんだと実感しました。自分たちの生活の一部や大部分がこんな風に展示になることは地元の人たちにとっても嬉しいことだと思います。三池争議の人たちが、チッソの組合員の子ども達の面倒まで見ていたことに驚きました。生活面まで支えていた三池の人たちの存在も大きかったことはあまり知られていないのかも知れないけど大切なことだと思います。水俣病の原因企業、チッソの体勢が、今回の展示で益々分かり、もっと勉強したいと思います。実際に資料を見ると、身分制や、朝鮮人の扱いなど、水俣病は起こるべくして起きたことがわかります。この展示を地元でやることはすごく、すごく意味があったと思います。来て良かったです。	

(第3種郵便物認可)

西 日

# 水俣病患者を支援

## チッソの元労働資料公開へ

### 写真5万7000コマなど整理



水俣病の原因企業チッソの労組でありながら、水俣病患者の闘争を支援してきた「新日本産業労働組合」の資料が来年1月から一般に公開される。資料を寄贈された熊本市の熊本学園大水俣学研究中心（原田正純センター長）が、6千点を超す書類や5万7千コマ以上の写真データの整理を終えた。同センター事務局長の花田昌宣教授は「公害問題と向き合った労働組合の記録は一般の価値がある」と話している。

#### 熊本学園大水俣学研究中心

を受けて無期限ストで対抗し、183日間の「安賃闘争」を戦い抜いた。政府が水俣病を公害と認定した68年には「何もしてこなかったことを恥とし、水俣病と闘う」とする「恥宣言」も行った。最盛期（51年）には4400人の組合員を擁したが、分裂などで減少。最後に残った二人が2005年3月に退職して解散した。60年間にわたる資料には、組合内部や会社側との協議資料をはじめ、労使のチラシや組合の文化活動の記録などがある。

激しい労使闘争を繰り広げた労組の資料は解散とともに散逸したケースが多く、終戦直後からの労組の資料が、ほぼ完全な形で保存されている例は珍しい。

新日本産業労働組合は1946年に結成。62年の春闘では安定した賃上げの見返りに、スト権放棄を求めた会社側に反発し、三池炭鉱労組（福岡県大牟田市）などの支援

新日本産業労働組合の資料を整理する熊本学園大水俣学研究中心のスタッフと元組合員たち

熊本学園大水俣学研究中心のスタッフと元組合員たち

## 水保・チッソ労組 60年闘争の記録

東京など4カ所で展示

「新日本窒素労働組合60年の軌跡―水保病とむきあった労働者」展が、30日～11月8日の東京・法政大市ヶ谷キャンパス会場を皮切りに、全国4カ所で開かれる。

熊本学園大水保学研究センター（熊本市）に、チッソの工場労働組合の記録が公開・展示されるのを記念したもの。原田正純センター長は「世界初、最大の工場排水による人的被害（公害）を引き起こした企業の労組の資料を公開す

る稀有で貴重な機会。わが国の近代化、工業化、戦後の復興から高度経済成長と日本の歴史を象徴的に読み取れる」などとしている。

展示は、①江戸時代の水保②水保市街の形成と日本窒素の創業③日本窒素労組結成と身分制撤廃闘争④安定賃金粉砕闘争⑤長期抵抗闘争⑥水保病患者と新日本窒素労組の組合の日常―という構成。

東京展は午前10時～午後5時。入場無料。11月3日午後1時半～5時、同大で小林直毅氏らの映像シンポジウム。8日午後2時～5時、原田氏らのシンポ。問い合わせは水保学研究センター―電096・364・5161。

●水保病とむきあった労働者 新日本窒素労働組合60年の軌跡 東京展 11月8日(日)まで10時～17時、東京都・法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー14階博物館展示室(市ヶ谷駅10分)。無料。3日(火)13時半～17時、映像シンポジウム(ポアソナードタワー14階資格課程共同実習室、講師・藤田真文、小林直毅)。8日(日)14時～17時、シンポジウム(法政大学外濠校舎5階S505号室、講師・原田正純、山下善寛)。熊本学園大学水保学研究センター(042・783・2306法政大・大原社会問題研究所)

# 大学



組合機関紙を繰る花田昌宣教授。「これだけ体系的に組合資料が残っているのは珍しい」という一熊本市の熊本学園大学

## 水俣病患者支えたチッソ第1組合の軌跡

### 30日から 活動紹介する展示

水俣病の加害企業チッソの労組でありながら、水俣病患者を支援した新日本産業労働組合(通称・第1組合、熊本県水俣市)の活動を紹介する展示「水俣病と向きあった労働者―新日本産業労働組合60年の軌跡」が30日、東京都千代田区の法政大市ヶ谷キャンパスで始まる。

展示資料を、熊本市の熊本学園大学水俣病研究センター(原田正純センター長)が整理した。センター事務局長の花田昌宣教授は「一人々が雇用不安に直面している現代、改めて労働組合のあり方と水俣病問題を考えしてほしい」と話す。

第1組合は1948年結成。82年、業上げの代わりにストを断り解散して残された膨大な資料を、第1組合は88年8月、水俣病を起した会社の労組として会

社を組織化を受け入れるよう求めた会社側に反対してストに突入したが、組合は分裂。配属などで差別的な待遇を受け、社員

の責任を問わなかったことを恥じた「反省書」を組合大会で決議。以来、水俣病患者と一線にチッソ水俣工場前に張り込め、組合員が訴訟で患者側の証言をしたりした。花田教授は「会社と対立し過酷な仕打ちを受けた組合員は、水俣市で少数者だった患者の気持ちがかつ

たと話す。法政大での展示は11月8日まで。11月17、20日は大阪市浪速区の大蔵人権博物館で大阪府、12月7、20日に熊本市の熊本学園大で熊本展、来年1月8、21日には水俣市の同大学水俣学現地研究センターで水俣病が

(読者誌等)

2009/10/26 月曜日

東京新聞

### 情報ボード

▶シンポジウム「新日本産業労働組合60年の軌跡－水俣病とむきあった労働者」11月8日午後2時～5時、東京都千代田区、法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎5階。講師は水俣学研究中心センター長の原田正純さんら。3日に映像シンポジウムも。参加無料。◎法政大学大塚社会問題研究所。☎(042)783-2300。

# 水俣病患者を支援、会社を告発、 新日窒労組資料 10万点を整理



巡回展に向け、新日本窒素労働組合の資料を整理する熊本学園大のスタッフ＝熊本市の熊本学園大

熊本学園大の水俣学研究センター（原田正純センター長）がこのほど、水俣病患者支援や水俣市を二分した「安定資金闘争」で知られるチッソの「新日本窒素労働組合」資料約10万点の整理を終えた。来年1月の一般公開に先立ち、30日から東京・法政大市ヶ谷キャンパスで記念展示会（11月8日まで）を開く。

## 熊本学園大 水俣学研究センター 30日から東京で展示

同研究センターは、史の観点からも、一労組の資料がほぼ完全な高度成長期に公害が社会問題化する中で「団交の場で責任追及するなど原因企業で唯一会社側と闘った組合」と位置付ける。労働運動組合員を抱えた、62

63年の「安定資金闘争」では、ストライキ権の放棄と引き換えに段階的な賃上げ（安定資金）を提案する会社側に対し、183日に及ぶ無期限ストライキで対抗。組合分裂も経験した。

会社から差別的待遇を受けた争議が契機となり、68年に水俣病の原因企業に勤めながら「何もしてこなかったことを恥とし、水俣病と闘う」とする「恥宣言」を決議。一次訴訟では、組合員が原告側証人として出廷し、会社の過失を告発した。

資料は2005年3月の組合解散を機に同センターに寄贈され、労組OBの協力を得ながら整理していた。日刊だった機関紙「さいれん」や患者支援の冊

子、ピラなどの文献や6万点を超える写真などがある。

同センターの花田昌宣教授は「リストラや派遣切りが当たり前になり、労働者の地位は下がる一方。そんな時代だからこそ新日窒労組の経験を伝えていく必要がある」と話している。

記念展示会は東京、大阪のほか、熊本学園大（12月7日～同20日）、水俣市（1月8日～同21日）でも開く。

（渡辺哲也）

### 水俣病との 関係示す80点

新日本窒素労組  
東京で資料展

水俣病の患者支援や「安定資金闘争」で知られる「新日本窒素労働組合」の資料展が30日、東京都千代田区の法政大市ヶ谷キャンパスで始まった。写真や組合機関紙など約80点を展示。60年に及んだ組合の歴史や水俣病とのかかわりをたどっている。11月8日まで。2005年の組合解

散を機に資料約10万点を譲り受けた熊本学園大の水俣学研究センターが、来年1月の一般公開を前に開いた。

組合結成や安定資金闘争、水俣病患者支援など7部構成。水俣病関連では、一次訴訟で組合員が原告側証人として社の労務政策や工場排水処理を証言した記録や、水俣病について「何もしてこなかったことを恥とし、水俣病と闘う(闘う)」との決議採択を伝える機関紙を展示している。



水俣病とのかかわりなどを示す「新日本窒素労働組合」の資料展＝東京都千代田区の法政大市ヶ谷キャンパス

資料展に駆け付けた「善寛さん(69)＝水俣市同組合元委員長の山下」は、組合が会社の社

会的責任を追及し患者も水俣病患者と同じと支援したことについて「(安定資金闘争後)会社に会社から受けた差別などから、自分たちも水俣病患者と同じとの意識で闘ったのでは」と振り返った。資料展は今後、大阪府八尾市の人権博物館(11月17日～29日)、熊本学園大(12月7日～20日)、水俣学現地研究センター(1月8日～21日)でも開かれる。(楠本佳奈子)

## 水俣病患者支援チツソの労組

# 東京で資料展始まる

水俣病の原因企業チツソの労組でありながら、一組の活動を紹介する企画



公書と向きあった新日本製薬労組の貴重な資料が並ぶ企画展  
11月30日、都内

歴「水俣病と向きあった労働者」新日本製薬労働組合60年の軌跡」が30日、東京都千代田区の法政大で始まった。2005年3月に解散した同労組の資料約10万点を譲り受けた熊本学園大学水俣学研究センターの主催。同労組は1946年に結成。62年の春闘で賃上げの見返りにス

ト権放棄を求めた会社側に反発。争議後、組合員は配転や自宅待機を命じられ、10年間の長期闘争に入った。68年には水俣病を起した会社の責任を問わなかったことを反省する「恥宣言」を決議。以後、水俣病患者を支援し、共闘してきた。企画展には会社との協議資料や組合機関紙、運動会プログラムや文芸誌まで組合の闘争と日常を紹介する約80点を並べた。同センター事務局長

の花田昌宣教授は「チツソが分社化されよとされている今こそ、労組や労働者のあり方、解決されない水俣病問題を考えてほしい」と話す。11月8日まで。12月7、20日に熊本市、来年1月8、21日に水俣市でも開く。



### 水俣病資料展

来月8日まで

水俣病の原因企業・チッソの社員らで作っていた新日本窒素労働組合（2005年解散）の資料展が30日、

千代田区富士見の法政大市ヶ谷キャンパスで始まった。「新日本窒素労働組合60年の軌跡―水俣病とむきあつた労働者」と題し、患者支援の記録など100点余りを展示し、水俣病と労働運動を重ねた構成だ。

熊本学園大水俣学研究所センターと労働問題を研究する法大大原社会問題研究所の共催。ポアソナードタワー14階博物館で午前10時～午後5時。11月8日まで。

# Exhibition shows Chisso union's Minamata efforts

BY GAO

An exhibition of documents compiled by a Chisso Corp. labor union opened Friday at Hosei University in Tokyo, showing how its members dealt with Minamata disease caused by the chemical company.

Launched in 1948, the union strove to secure stable working conditions for its members, but became aware in 1966 that it was "shameful" as humans and so employees not to help the victims or address the contamination of Kumamoto Prefecture's Minamata Bay.

The mercury poisoning disease broke out in the 1950s and continued into the 1960s, affecting about 2,300 people, including 1,700 who died. Since then, the union has been helping those with Minamata disease by testifying in lawsuits on their behalf and promoting activities to assist them.

It also held a meeting with victims and their families in front of the Chisso factories, declaring Chisso workers

themselves "victimizers."

"I hope the exhibition will make the public aware of how the in-company union supported the Minamata disease sufferers," said Masaoei Hanada, professor at the Open Research Center for Minamata Studies at Kumamoto Gakuen University, which currently has about 190,000 union records and maintains a permanent exhibition on the poisoning.

"Visitors will be able to see the overlap of the history of the Minamata disease issue with that of Chisso workers," Hanada said.

The exhibit shows transcripts of the union members' court testimony, along with around 100 other union documents, including fliers and demonstration photos. It runs through Nov. 8.

Among the items displayed is a union newspaper, issued on May 28, 1959, that called for the company to compensate the victims or risk being "socially eliminated."

The exhibit will travel to Osaka in late November, to



Helping hand: Dr. Shigeo Ekino (right) assists Masatami Takishita, who suffers from fetal mercury poisoning, as they walk in Minamata, Kumamoto Prefecture, in June 2007. AP

Kumamoto Gakuen University in the city of Kumamoto in December and to the city of Minamata in January 2010.

The union was disbanded in

2005 when its last two members retired. The documents were later entrusted to the university's research center, which aims to disseminate the

lessons learned from the mercury poisoning incident.

Minamata disease is a neurological disorder that struck local residents when Chisso

flushed waste water contaminated with mercury from a synthetic resin plant into Minamata Bay. The mercury entered the food chain when residents ate contaminated fish. A similar poisoning was confirmed in Niigata Prefecture in 1966, caused by wastewater from a Showa Denko K.K. plant.

The Diet enacted legislation in July offering relief to previously unrecognized victims of the poisoning. The law splits Chisso, formally known as Shin-Nippon Chisso Hiryo K.K., into two entities — a holding company responsible for financially compensating the victims, and a subsidiary that continues to operate the business.

The holding company will use dividends and proceeds from sale of the subsidiary's stock to make lump-sum payments to sufferers. The parent company will be liquidated once it makes compensation.

Some victims and their supporters, however, oppose the policy, saying the liquidation "will allow the victimizer to avoid atoning" for its actions.

## Union's mercury-poisoning documents on show

Kyodo News

An exhibition of documents compiled by a Chisso Corp. labor union is under way at Hosei University in Tokyo, showing that its members faced the Minamata mercury-poisoning disease caused by their employer.

Launched in 1946, the union worked to secure stable labor conditions, but it highlighted in 1968 the "shamefulness" that the chemical maker—which brought about the tragedy caused by its contamination of Minamata Bay in Kumamoto Prefecture—was

doing nothing for the victims and refusing to tackle the poisoning issue.

Since then, the union has supported Minamata disease sufferers by testifying at damage lawsuits on their behalf and by actively promoting civil activities to assist the victims.

It also held a memorial meeting with the sufferers and their bereaved families in front of the Chisso factory, declaring Chisso workers themselves as "victimizers."

"I expect the exhibition to introduce to the public the existence of the in-company union that supported the Minamata disease

sufferers," said Masanori Hanada, a professor at the Open Research Center for Minamata Studies at Kumamoto Gakuen University, which maintains the 100,000 union records' items and is hosting the exhibition.

"The visitors will be able to see history's overlap between the Minamata disease issue and that of Chisso workers," Hanada said.

At the exhibition, which runs through Nov. 8, minutes of union members' court testimonies are displayed, along with about 100 other union documents such as fliers and photos of demonstrations.

# 水俣病と向き合った労働者描く

## あすから大阪人権博物館

### 支援の記録を展示



海上からのスト破りを警戒し、小型船でヒケを張る新日本寮業労働組合の組合員。1962年、熊本学園大学水俣学研究センター提供

水俣病を起こした企業の労組でありながら患者を支援した「新日本寮業労働組合」の軌跡をたどる特別展「水俣病と向きあった労働者」が、17日から大阪市浪速区の大阪人権博物館で開かれる。

同組合は1968年8月、「今まで水俣病と闘い得なかったことは、まさに人間として、労働者として恥ずかしいこと」とする「恥言書」を大会で決議。以後、会社側の妨害に耐えながらカンパや抗議行動への参加で患者らを支援、公害対策が不十分だった工場の実情を訴訟で証言するなど活動を続けてきた。

特別展では、争議の模様や患者への支援活動の記録、盛んにまかれた中傷ビラの裏物などを展示する。主催の熊本学園大学水俣学研究センターは、水俣病を問うことで社会のありようを検証する「水俣学」を提唱する。同センター事務局長の花田昌宣教授は「労働者の使い捨てや切り捨てが加速する現在、改めて労働組合のあるべき姿を問いかけたい」と話す。

29日まで、午前10時～午後5時、入場料250円。29日午後2時から、同センター長の原田正純教授らによるシンポジウムを開く。問い合わせは大阪人権博物館（06・6561・5891）。

# 水俣病と労働者 苦悩の歩み展示

## あすから大阪人権博で



海上からのスト破りを警戒し、船でピケを張る新日本窒素労働組合の組合員＝1962年、熊本学園大学水俣学研究センター提供

水俣病を起こした企業の労働者でありながら患者を支援した「新日本窒素労働組合」の軌跡をたどる特別展「水俣病

とむきあった労働者」が、17日から大阪市浪速区の大阪人権博物館で開かれる。同組合は1968年8月、

「今まで水俣病と闘い得なかったことは、まさに人間として、労働者として恥ずかしいこと」とする「恥宣言」を大会で決議。以後、会社側の妨害に耐えながらカンパや抗議行動への参加で患者らを支援、公害対策が不十分だった工場の実情を訴訟で証言するなどの活動を続けてきた。

特別展では、争議の様相や患者への支援活動の記録、盛んにまかれた中傷ビラの実物などを展示する。主催の熊本学園大学水俣学研究センターは、水俣病を問うことで社会のありようを検証する「水俣学」を提唱する。同センター事務局長の花田昌宣教授は「労働者の使い捨てや切り捨てが加速する現在、改めて労働組合のあるべき姿を問いかけてい」と話す。

29日まで、午前10時～午後5時、入場料250円。29日午後2時から、同センター長の原田正純教授らによるシンポジウムを開く。問い合わせは大阪人権博物館(06・6561・5891)。

# 水 俣 病

## 「何もしなかった」 恥宣言

# ↓患者支援

### 原因企業「チッソ」労働組合の歩み特別展



水俣病患者支援に関する資料などが並ぶ会場

同センター客員研究員(68)は「以前から支援していた労働者としては『どうせ』『という思いだったが、宣言までには自分たちの首を絞める』という意見もあつたらしい」と当時の状況を説明する。

水俣病患者を支援した原因企業・チッソの労働組合「新日本窒素労働組合」の歩みを紹介する特別展「水俣病とむきあつた労働者」(熊本学園大水俣学研究所センター主催)が、大阪市浪速区浪速西3の大阪人権博物館で開催されている。

同組合は1968年8月に開いた定期大会で「何もしてこなかったことを恥とし、水俣病と闘う」とする「恥宣言」を採択。公害の原因企業の労働組合としては極めて異例の患者支援に取り組んだ。

78〜90年に委員長を務めた山下鶴寛・

要示は、組合が保管していた資料など約100点。労働争議など活動の記録や支援活動で使用されたたすき、組合が撮影した患者の記録映像など貴重な資料が並ぶ。

29日まで(24、27両日は休館)。午前10時〜午後5時(入館は午後4時半まで)。大人250円▽大学・高校生150円▽中学生以下と65歳以上、障害者無料。29日午後2時から、山下さんらによるシンポジウムもある。同館(06・6561・5889)。

【曾根田和久】

## たすき、患者映像など100点

「新日本窒素労働組合60年の軌跡」展が7日から、熊本市の熊本学園大学で始まった。

同労組は、水俣病の原因企業チッソの組合である。

チッソの前身の曾木電気が鹿兒島・大口に設立されたのが1908（明治39）年。08年に水俣に工場を建設、本格操業を始めた。同労組は敗戦後の46年に結成されたが、安定賃金闘争で分裂。いわゆる「第一組合」の少数組合となり、2005年3月、最後の組合員2人の退職で満59年の歴史に幕を下ろした。

同労組が戦後日本の労働運動に異彩を放つのが、水俣病問題に対して何もなかったことを反省した、68年の「恥宣言」だ。以後、公害反対ストや患者支援を行い、裁判では工場を告発する証言を行った。

同労組が関係資料を同大水俣学研究センターに一括寄贈。整

## 【射程】「水俣病とむきあった労働者」

理が終わったことから巡回展が企画され、東京、大阪に続いての展となった。

「水俣病とむきあった労働者」がテーマだが、会場で思い起こしたのは「自分とむきあった労働者」という言葉だった。水俣病を起した会社の従業員として何をすべきか自問し、差別的待遇の中で自分の働く意味を問いつけた組合員たち。「自分とむきあう」ことの難しさは、日々痛感すること。それだけに同労組の歩みは貴重で、社会的な財産とも言えよう。

社名がチッソとなった後も、以前の名前を使っていることを元労組委員長の高本達明さんは「会社に合わせる必要はない」ときっぱりと書いているが、ここにも同労組の意地がにじむ。

20日まで。12日午後1時から  
は、同大で元労組員によるシンポジウムもある。（高峰）

2009.12.8

同会の相談員が債務者らの相談に応じ、トラブル解決を支援する。受け付けは午前10時から午後4時まで。電話相談は同会 ☎096(351)7400。面談による相談も可。  
 (奥村国彦)



資料の説明をする元新日窒労組委員長の山下善寛さん(右)と熊本市の熊本学園大

### 水俣病、内部から批判

## 新日窒労組の闘い 歴史たどる巡回展

熊本学園大

水俣病の原因企業チツソの「新日本窒素労働組合」の貴重な資料を公開する巡回展が7日、熊本市大江の熊本学園大で始まった。20日まで。入場無料。

同労組は、自社が引き起こした水俣病を内部から批判。患者たちの支援も続け、「日本の労働運動史上、稀有な存在」(花田昌宣・同大教授)という。

10月に東京をスタートしてから3カ所目の開催となる今回は、同労組や水俣工場に関する写真や書類など組合員の闘いの歴史が伝わっている105点を展示するほか、動画資料も見ることが出来る。

土曜と日曜は午前10時から午後5時まで。平日は仕事帰りの人に

も見てもらうよう午後8時まで延長する。12日午後1時からは、同大で労組OBによるシンポジウムもある。

オープニングセレモニーでは、同労組元委員長の下山善寛さん(69)と水俣市が「水俣病患者とともに闘った労組の歴史を見てほしい」とあいさつした。  
 (石真謹也)



水俣病患者支援のチッソ元労組所蔵

# 恥宣言 など資料105点

## 20日まで、熊本学園大で巡回展

水俣病の原因企業・チッソの組合でありながら、水俣病患者を支援してきた新日本製薬労働組合が所蔵していた資料の巡回展「水俣病と向きあった労働者 新日本製薬労働組合60年の軌跡」が7日、熊本市の熊本学園大で始まった。20日まで、巡回展は東京、大阪に続き、全国で3番目。結成(1946年)から解散(2005年)までの

約60年間の文献や写真などの資料約7万点の内、105点を展示している。



写真ハネルなど貴重な資料に見入る見学者

資料には、水俣病と戦ってこなかったことを組合の恥とする「恥宣言」決議文が掲載された1968年の文書のほか、文集など組合の日常を示したのも並ぶ。

オープニングセレモニーには原田正純・同大水俣学研究所センター長や元組合員らが参加。原田センター長は「水俣学の重要な部分が完成した。不幸な事件だったが、いろんな側面から水俣病像が明らかになれば、後世の宝物となる」と述べた。

12日午後1時から同大でシンポジウムがある。巡回展は来年1月8日から水俣市の同大水俣学現地研究センターでも開催される。

# 安全、健康より生産性

新日産労組OB  
熊本市でシンポ

## チツソの体質指摘

水俣病の原因企業チツソを内部から批判したことで知られる新日本薬業労働組合の元組合員5人によるシンポジウムが12日、熊本市の熊本学園大であり、安全や健康よりも生産性を重視した同社の体質について語った。

一環で、同大で20日までに開催中の新日産労組資料巡回展に合わせて開いた。

1973年に患者側が勝訴した一次訴訟で患者側証人として出廷した熊本市の石田博文さん(68)は「生産を8、7割に落とせば危険なガスも発生しなかった

のにフル稼働させられ、労災につながった」と証言した。

60年代、水俣を二分した安富闘争の後、同社は新日産労組員を冷遇。草むしりなどほかりさせられた水俣市の糸田憲夫さん(69)と山下紀久子さん(69)は「働きたくても仕事を与えられず、つらかった」と振り返った。

同大の水俣学講義の

水俣市の江口睦美さん(72)は同社の後藤舜

吉・現会長から「労組が政治問題を取り上げるのはおかしい」と言われたエピソードを紹介。夫の和伸さん(73)は「闘いを通じ、チツソあっての水俣でなく、労働者・市民あつてのチツソであることを知った」と話した。

(石貫謙也)

(第3種郵便物認可)



## 新日室労組の 資料展始まる

水俣市で21日まで

水俣病の原因企業チッソの「新日室労働組合」の貴重な資料を公開する巡回展が8日、水俣市婦人会館などで始まった。写真。熊本学園大水俣学研究センターの

主催で21日まで。

同労組は1960年代のしつこい労働争議を経て、68年に水俣病患者支援へと転換。会社の公害責任を追及した。2005年3月の組合解散に伴い、同センターが約10万点に及ぶ資料を整理した。

巡回展は昨年10月に東京からスタートし、4カ所目。機関紙「さいれん」やピラ、争議の写真などを展示している。関連イベントでは13-15日に組合員家族の手芸や書画などを集めた作品展、16日に経済評論家佐高信氏の記念講演をそれぞれ市公民館で開く。

オープニングセレモニーには関係者約50人が出席。元執行委員長横田重信さん(81)が「闘いの結晶が詰まった資料を多くの人に見ていただきたい」とあいさつした。

入場無料。同大水俣学現地研究センター ☎0966(63)5030。

(渡辺哲也)

# 患者支援の軌跡130点

新日本窒素労組資料の巡回展

地元・水俣で締めくくり

21日まで

水俣病の原因企業チッソの労組でありながら、水俣病患者を支援してきた新日本窒素労組資料の巡回展が8日、水俣市浜町の熊本学園大水俣学現地研究センターなどで始まった。昨年10月の東京展を皮切りに大阪、熊本と続いた巡回展は、水俣が締めくくりとなる。21日まで。

同センターと隣接する市婦人会館には1946

年に結成、2005年に解散した同労組60年の軌跡を揃く約130点の資料を展示。アジア最大の化学工場とされた戦前の朝鮮窒素肥料興産工場の写真や水俣病と関わってきたことを組合の恥とした「恥宣言」の決議文などもある。

99年まで同労組の執行委員長を務めた糸田憲夫さん(69)は「組合の闘いの記録を地元で展

示できることの意味をかみしめている」と話した。

資料を譲り受けた熊本学現地研究センターは所蔵する約10万点の一部を、巡回展後の26日から一般公開する。



水俣市で始まった新日本窒素労組の活動を  
紹介する企画展

新日産労組資料公開記念

### OBや家族の作品展

水俣市 絵画や陶芸淵点展示

新日本産業労働組合の館で始まった。約1000資料が26日から一般公開されるのを記念して、「新日産労組OB家族の作品展」(熊本学園大水俣学研究センターなど主催)が13日、水俣市の市公民

病弱者の支援活動をする一方、音楽や書道、写真撮影など文化的な活動にも取り組んできた一面を紹介。労組の闘争集会などの写真もあるが、自然の景観を写した作品や手作りの手まり、重量感のある書なども展示されている。 退職組合員でつくる

「親交会」事務局長の蔵本賢治さん(69)は「先輩や友人らの隠れた才能に驚いている」と話した。

水俣市  
**新日室労組OB家族 作品展**  
**絵画や手芸…300点並ぶ**



約300点が出品された新日室労組OB家族の作品展＝水俣市

新日本窒素労働組合の資料公開を記念した「新日室労組OB家族の作品展」が、水俣市

濱町の市公民館ホールで開かれている。15日まで。同労組はチッソの労働組合として1960年代に激烈な労働争議を経験し、水俣病患者支援へと転換したことで知られる。2005年3月の組合解散後に熊本学園大が資料を整理。水俣市で巡回展を開催中で、併せて家族の作品展も企画した。会場には、元組合員とその家族が絵画、手芸など約300点を展示している。元執行委員長で書道の作品を出品した山下善寛さん(69)は「組合員は昔から趣味が多彩だった。訪れた人に当時を懐か

しんでもらえてうれい」と話している。入場無料。午前10時～午後6時。16日は関連イベントで、経済評論家・佐高信氏の記念講演が市公民館である。(渡辺哲也)

## 会社国家の病 佐高氏が講演

水俣市で開催の  
新日産労資料展

新日本窒素労働組合  
の資料巡回展を水俣市  
で開催している熊本学園  
大水俣学研究中心ター  
は16日、市公民館で記  
念講演を開き、経済評  
論家佐高信氏が「会社  
国家・日本の病根―水

俣病が問いかけたもの」と題して話した。

約120人が参加。

佐高氏は「戦後、地域  
や家庭に民主主義が入  
ったが、会社だけは会  
社があらゆるものに優  
先する『憲法番外地』  
になってしまった」と  
指摘。国家との関係に  
についても「結び付きが  
見えにくく、会社の意  
志が立法や政治を左右  
することが多いのが実  
態」と述べた。

その上で、水俣病の  
発生後も加害企業チッ  
ソが有機水銀を含む工  
場廃水を流し続けた事  
件の構図について、佐  
高氏は「会社国家の病  
根が露骨に現れた。こ  
れからは消費者が会社  
をチェックできる成熟  
した社会が求められて  
いる」と語った。

(渡辺哲也)



平成21年10月30日～平成22年1月21日  
水俣学研究センター  
「新日本窒素労働組合60年の軌跡」  
資料巡回展



10月30日から法政大学市ヶ谷キャンパスでの開催を皮切りに、新日本窒素労働組合資料公開記念巡回展「水俣病とむきあった労働者～新

日本窒素労働組合60年の軌跡～」資料展(主催:本学水俣学研究センター)が開催された。

本資料巡回展は、東京以西の4地区を縦断する形で、東京(法政大学市ヶ谷キャンパス)、大阪(大阪人権博物館)、熊本(本学)、水俣(水俣学現地研究センター)で開催され、約4200名が訪れた。

また、12月12日には、本学14号館で「水俣病と向き合った労働者」と題して、元新日本窒素労働組合員を招きシンポジウムを開催した。

パネリストは、安定賃金闘争運動時に最前線でチツソと闘った、石田博文氏(元新日窒労働組合執行委員)、糸田憲夫氏(元新日窒労働組合執行委員)、江口和伸氏(元新日窒労働組合青婦部長)、江口睦美氏(元新日窒労働組合婦人部長)、山下紀久子氏(元新日窒労働組合婦人部長)の5人で、会社の利益優先の体質が公害拡大につながった要因の一つであることや、安定闘争の模様を述べた。

コーディネーターを務めた花田昌宣社会福祉学部教授は「会社の圧力に屈せず、組合は最後まで勢いを落とすことはなかった。これは労働組合問題において日本では珍しいケース。当時の組合員の活動が如何に熱意あるものであったか想像に難くない。本学に所蔵される資料を整理・研究することでその経緯を次の世代に繋いでいきたい」と締めくくった。





---

「新日本窒素労働組合60年の軌跡」全国巡回資料展  
報告書

2010年3月1日

編著 井上ゆかり  
発行 熊本学園大学水俣学研究センター  
センター長 花田昌宣  
〒862-8680 熊本市大江2-5-1  
TEL 096-364-8913  
E-mail: [minamata@kumagaku.ac.jp](mailto:minamata@kumagaku.ac.jp)  
URL: <http://www.kumagaku.ac.jp/minamata/>

---

